

編集後記

本年 10 月に、ノルウェーのテレマーク大学教育学部からビヨン・オークレ教授とスウェーデンの Lund 大学経済史研究所からアンダーシュ・ニルソン教授を名古屋大学教育学部に客員研究員として招待することができた。ビヨン・オークレ教授には産業教育学会の研究大会のシンポジストとして、アンダーシュ・ニルソン教授には産業教育学会での自由研究発表の場において参加していただいた。また、本年の 12 月にはスウェーデンからマ・リ・スベンソン准教授を名古屋大学教育学部の客員研究員として迎えることになっている。我が研究室がこれまでの 10 年間に積極的に取り組んできた国際交流の成果が結実してきたように思われる。今年度、私は、中国、フィンランド、スウェーデン、ロシアと 4 ヶ国を訪問した。この訪問によってこれらの国で技術教育や職業教育をめぐる動きが急速に変化していることを実感することができた。スウェーデンにおける動きについては、産業教育学会でアンダーシュ・ニルソン教授とともに共同で報告した（「最近のスウェーデンにおける高校職業教育・訓練政策の転換について」）。この報告をもとにした論文は来年度の室報第 8 号に掲載する予定である。ビヨン・オークレ教授が産業教育学会でのシンポジウムの報告に向けて執筆した論文が本号の冒頭の論文である。この論文の翻訳は大学院生の加藤敬之さんに担当してもらったが、この翻訳は大学院のゼミにおいてビヨン・オークレ教授も交えて集团的に検討したので、ゼミ全体の成果でもある。

翻訳「プロジェクト法への移行について」は昨年 6 号に掲載したニコライ・ゴッペ氏の論稿“О переходе к проектной технологии”の日本語訳である。論文“Трудовое обучение и технологическое образование школьников в Российской Федерации”は、ロシア共和国における労働科教育と技術教育に関するものである。この論文は私が本年 10 月にロシアのヤロスラバリ教育大学において開催された技術教育に関する国際会議で知り合った、ホトゥンツェフ・ユーリー・レオンチェヴィッチ教授（モスクワ教育大学）に執筆していただいたものである。この会議の終了後にヤロスラバリ市とその近郊の農村部の普通教育学校で“テクノロジー”（技術）の授業や実習室を見学させていただく機会を得た。また、ヤロスラバリ教育大学でのテクノロジー教員養成のシステムについても話を聞く機会を得たが、テクノロジーの教育やその教員養成システムがこの 10 年間に大きく変化してきたことは非常に興味深いものであった。この教科の教員養成課程は実習を職業技術学校（ПТУ）において実施し、教育大学では教育学や心理学を中心とした教科教授法を学ぶように大きく変化した。このような変化はヤロスラバリ教育大学だけで行われているのか、それとも他の教員養成大学でも行われているのかは不明であるが、このような動向についても次号以降に論文を掲載できればと考えている。なお、本号に掲載したロシア語の論文の翻訳については次号に掲載できるようにしたい。本号に掲載した 2 つの翻訳は、以前の室報に掲載した英語論文の日本語訳でこれらもこの 1 年間の大学院ゼミで集团的に検討したものである。

本号の最後に、森下一期著作目録を掲載した。森下一期先生は 1985 年 4 月から 1990 年 3 月まで技術教育学講座の助教授として在任された。東京工業大学の修士課程在学中に和光学園の中学部で数学を教えられたことが契機で修士課程を中退し、教育現場に移られ、技術科や工作教育の実践・研究に取り組まれた。その後本講座の初代教授の長谷川淳先生に示唆を受けてロシアの手の労働や労働科の研究にも取り組まれるようになった。1973 年には民間教育研究団体の一つである「子どもの遊びと手の労働研究会」（略称手労研）を結成され、長く事務局を担当された。1978 年には、山崎昌甫先生の招きで職業訓練大学校に移られ、職業訓練の研究、とりわけ技能の指導法に関する研究に取り組み

れるようになった。1985年から名古屋大学教育学部に移られたのは、先に述べたとおりである。私が森下先生と初めてお会いしたのは、まさにその1985年4月であった。私自身がロシアの労働科の歴史に関する修士論文を執筆した直後であったので、本研究室の創設者である長谷川淳先生が取り組んでこられたロシアの総合技術教育や労働教育の研究が名古屋大学で脈々と続けられていることに感銘を受けたことを思い出す。5年間という短い期間ではあったが、当時の本講座の大学院生（私も単位互換学生として在籍した）にさまざまな影響を与えたように思われる。森下一期先生は1990年からは和光学園という教育実践の現場に帰られ、普通科の高校生を対象とした技術教育の実践的研究に取り組まれていく。これらのことは著作目録を一瞥すればわかることである。この著作目録に掲載した論稿は、名古屋大学附属図書館のリポジトリに登録する作業を現在進めている。それが完了した段階で、これらの論稿は本研究室のHP（<http://gijyutukyoublogspot.com/>）に目録を掲載して、そこからリンクを張ってリポジトリを通して閲覧できるように作業を進める予定である。なお、本研究室のHPへのアクセスは、名古屋大学教育学部のHPの教員紹介ページから可能になったので、そのルートでアクセスしていただければ幸いである。

先に述べたように本年10月に私はロシアの学校を見学した。労働科の授業では木工の技能が丁寧に教えられており、また教科書にもそれに関する詳しい記述がなされていたが、現在においてもロシアの農村部ではそれらの知識や技能が実生活と結びついているという印象を受けた。農村部の多くの家は、住民が自分でつくっていて、家の外観から大工が作ったものでないことはすぐにみとることができたからである。厳しい寒さの冬を迎えるこの地域で人々が今日でも自分たちで作った家に住むことができるだけの技能を身につけさせることに労働科の授業が一役を買っているのではないか、そんな印象をうけた。

本年11月27日には名古屋大学教育学部において北ヨーロッパ学会の研究大会が開催される。本号もその場ではじめて披露されることになるであろう。

（横山悦生）